

京都女子学園裁縫教育資料の 整理とアーカイブ化

青 木 美保子

はじめに

裁縫教育は、近代の学校制度が整うなかで、女子教育において重要な位置を占めていたものと考えられる。京都女子学園でも、開学当初から「裁縫」は授業科目であったが、明治44（1911）年には、京都高等女学校の併設校として「私立京都裁縫女学校」を開設し、裁縫に特化した女子教育に取り組むこととなった。以後、本学園の裁縫教育は、社会の変化に即した教育内容を構築し、時代とともに変化しながらも、現在まで連綿と続いている。明治期の男性中心の高等教育のなかで、女性のための高等教育を目指す小さな私塾から始まった本学園が、社会の動向と連動しながら規模を拡大し、確固たる高等教育機関に成長するまでの流れのなかで、裁縫教育は重要な役目を果たしてきたのである。

京都女子高等専門学校を前身とする京都女子大学には、この裁縫教育の授業において使用されていた大正・昭和期の見本着物、部分縫い見本、和裁教科書、生地見本としての反物、当該時期学生の提出物など、さまざまな教育資料が、長年、整理されることなく家政学部生活造形学科の実習室や研究室の片隅に眠った状態で残っていた。現在の生活造形学科アパレル領域の教育内容は、衣服・繊維・ファッション産業に資する人材育成を主眼としているため、これらの教育資料は、授業での役目を終え、その価値を知られることもなくひっそりと筆筒や収納箱に眠ったままとなっていたのである。そして、今となっては歴史資料ともいえる貴重な資料であるにもかかわらず、廃棄の運命すら感じられる状況にあった。

ところで、全国の多くの教育機関にも、本学と同様に裁縫教育資料が残され

ている。本学園の資料も含め、これらの裁縫教育資料は、女子教育の歴史を語るうえで重要な役割をもつ歴史資料であるとともに、裁縫教育の研究に資する貴重な資料でもある。しかし、資料未整理の教育機関が多く、資料の整理とその価値の提示は喫緊の課題である¹⁾。

そこで本研究では、こうした裁縫教育資料の新たな価値を見出すために、生活造形学科アパレル領域の実習室や研究室に散在する裁縫教育資料を集約し、資料撮影、資料情報（形態、サイズ、生地情報等）の収集を行い、ナンバリングしてアーカイブ化し、データベースを作成することとし、加えてこの資料の活用事例を示すことで、資料価値の一側面を提示することとした。

本論文の構成としては、第1章「資料のアーカイブ化」では、まず、本研究で決定した資料のナンバリング方法・名称・属性項目について述べたうえで、実際の資料計測について報告し、次に、そこで得た情報から構築したデータベースについて説明する。第2章「資料活用1 データベースを利用した資料分析」では、構築したデータベースを活用して、このデータベース化を含めた資料のアーカイブ化の価値を示す。また、第3章「資料活用2 資料展示とワークショップ」では、アーカイブ化したこの和裁教育資料の存在やその価値を広く伝える試みとして開催した展覧会とワークショップについて報告する。

第1章 資料のアーカイブ化

1-1 資料のナンバリング方法・名称・属性項目の決定

資料は裁縫教育に関する研究の素材として活用されることが想定されるため、計測項目を広い着眼点から設定することとし、和裁に関する教科書および、博物館・資料館²⁾における着物資料情報等を参考に、情報項目を以下のように決定した。

- ・ナンバリング方法：親番号（1. 着物 2. 帯 3. 下衣 4. その他 5. 書籍）+子番号
- ・名称：地色+素材（染織技法）+紋様+種類

- ・判別項目：箱番号、種類、仕立て、衿の種類、素材、技法、紋様、地色、紋の有無、印章・銘記、保存状態、来歴取得、調査履歴、備考（計14項目）
- ・計測項目：タテ、ヨコ、肩幅、衿丈、袖幅、袖付、袖丈、袖の丸み、後ろ衿幅、身丈、後幅、前幅、衤幅（計13項目）

以上の決定項目をまとめ、資料の判別・計測作業の際に情報を記入するための個別調書様式を作成した。

1-2 資料計測

1-2-1 資料計測の効率化

着物資料計測の効率化のため、横棒をフックに掛ける仕組みのオリジナル計測用衣桁を製作した。この衣桁を使用することで、資料撮影の際、着物の袖を横棒に通したままで向きを替えることができるようになり、計測時間の大幅な短縮が実現した（図1）。



図1 オリジナル計測用衣桁と
資料 No.1-040「薄紅地十字
緋縫紋様単衣長着」

1-2-2 資料の判別及び計測実施記録

以下、計測実施記録を記す。

実施期間・時間：2023年8月7日～9月8日（13日間）延110時間

場所：本学 B校舎 B411実習室

計測スタッフ：筆者、ゼミ生2名、学生アルバイト2名（6名の学生のシフト制）

アルバイト内容：資料の整理・撮影・計測の補助、データ入力作業

この作業によって、1. 着物136点、2. 帯36点、3. 下衣類5点、4. その他213点、5. 書籍44点、総資料数434点の資料を整理、判別、計測することができた。内訳として、着物は、長着103点（うち襦袢14点）、羽織24点、コー

ト 9 点。帯は、丸帯 2 点、袋帯 6 点、名古屋帯 9 点、半幅帯 4 点、兵児帯 6 点、角帯 2 点、作り帯他 7 点であった。下衣は、袴 4 点、さるべ 1 点³⁾であった。その他には、部分縫い、雛形、学生の提出物など親番号 1 から 3 に該当しない資料をすべて含めることとした。

1-3 データベース化

《Microsoft Office Access》を利用し、全ての資料情報をデータベース上で管理できるようにした。以下、作成した独自の検索システムについて、その概要を記す。

1-3-1 トップ画面

Access を立ち上げて最初に表示される画面を「トップ画面」とする（図 2）。ここでは本学園の和裁教育資料についての説明文と、検索画面・新規追加画面に移動できるボタンを表示させた。

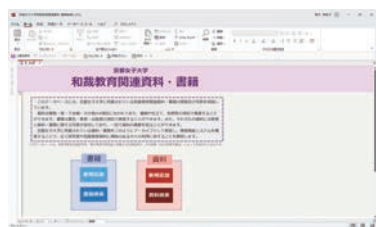


図 2 トップ画面

資料は、「資料」と「書籍」に分けて表示し、「資料検索」、「資料 新規追加」、「書籍検索」、「書籍 新規追加」計 4 つのボタンがあり、押すとそれぞれの画面に移動するようにした。ここでいう「資料」とは、書籍以外のすべてのものを指す。

1-3-2 検索画面

資料の検索画面（図 3）では、計測・判別項目に沿った検索項目を設定した。「親番号」、「子番号」、「種類」、「仕立て」、「衿の種類」、「素材」、「技法」、「紋様」、「地色」、「紋の有無」、「紋の表現方法」、「紋の種類」、「印章・銘記」は選択式、「名称」、「備考」はフリーワード検索とした。複数の条件で検索することも可能である。

検索結果は下半分に一覧で表示されるようにした。また、それぞれの資料の

左側に「単票表示」、「編集」、「印刷」のボタンを設置した。「単票表示」ボタンを押すと資料の単票が表示される（後述する「1-3-3 単票表示画面」を参照）。「編集」ボタンを押すと既に記入した個別調書を編集することができる（後述する「1-3-4 登録内容修正画面」を参照）。「印刷」ボタンを押すと資料の単票の印刷プレビューが表示され、印刷できる（後述する「1-3-6 単票印刷画面」を参照）。左下にある「トップに戻る」ボタンを押すとトップ画面に戻ることができる。

書籍の検索画面（図4）は資料と同様に、検索・判別項目に沿った検索項目を設定した。資料検索画面と異なる点は検索項目である。「書名」、「著者」、「出版社」の項目を設定し、全てフリーワード検索とした。検索結果の表示方法、単票の表示方法、印刷の方法は前述した「資料検索画面」と同様に設定した。

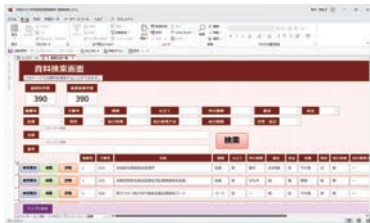


図3 資料検索画面

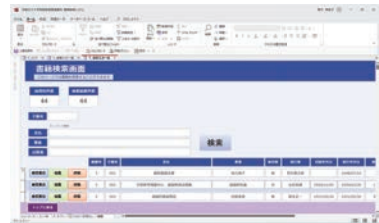


図4 書籍検索画面

1-3-3 単票表示画面

個別調書と同様のレイアウトで資料（図5）、書籍（図6）についての単票が表示される画面を作成した。ここでは資料・書籍の写真が表示されるようにした。あらかじめ定めておいた撮影箇所をもとに撮影した複数の写真が入っており、写真をクリックすると左上に表示される矢印（「→」と「←」）を押すことで、複数の写真を見ることができる。また、下に「トップに戻る」ボタンと「検索画面へ戻る」ボタンを設置することで、それぞれのページに移動しやすくした。

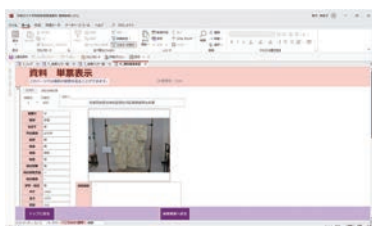


図5 資料単票表示画面

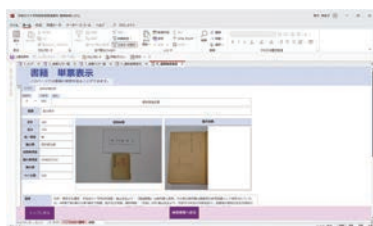


図6 書籍単票表示画面

1-3-4 登録内容修正画面

既に登録した資料（図7）、書籍（図8）の単票を編集することができる画面を作成した。編集したい項目をクリックし、入力することで編集できる。

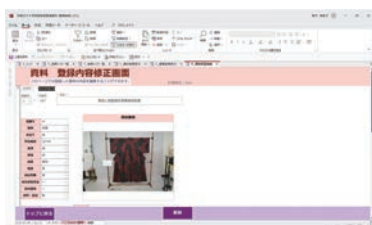


図7 資料登録内容修正画面

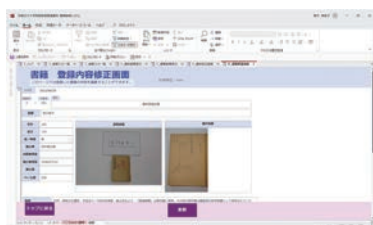


図8 書籍登録内容修正画面

1-3-5 新規追加画面

新しい資料（図9）、書籍（図10）を追加することができる画面を作成した。個別調書と同じレイアウトでそれぞれの項目が記入できるようになっている。「親番号」、「種類」、「仕立て」、「衿の種類」、「素材」、「技法」、「紋様」、「地色」、「紋の有無」、「紋の表現方法」、「紋の種類」、「印章・銘記」、「保存状態」は選択式、その他は自由記述とした。

また、「名称」の右下にある四角い空欄には写真が挿入できるようにした。空欄をクリックすると、「添付ファイルの管理」と表示されるクリップのボタンがある。それを押すと添付ファイルを管理するページが表示されるので、「追

加（A）」を押し、挿入したい画像を選択する。

すべての項目を記入し終えたら、右下にある「追加」ボタンを押すと資料が新規追加されると同時に、新たに資料を追加するページが開く。

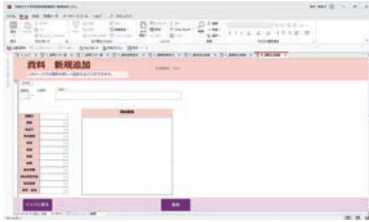


図9 資料新規追加画面

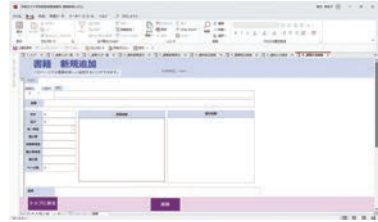


図10 書籍新規追加画面

1-3-6 単票印刷画面

資料（図11）・書籍（図12）の単票を印刷することができる画面を作成した。

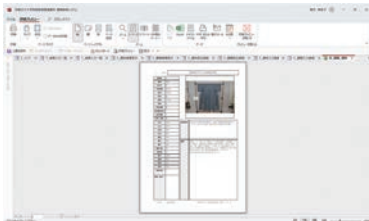


図11 資料単票印刷画面

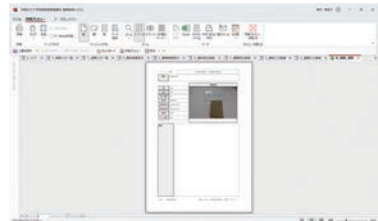


図12 書籍単票印刷画面

第2章 資料活用 1 データベースを利用した資料分析

ここでは、構築したデータベースの活用について、実践事例を示すことで、このデータベースを含めた資料アーカイブの価値を示す。

以下、6つの視点でデータ活用を実践した。手順としては、いずれも、①対象の資料を Access で検索・抽出し、②場合によっては、保管場所からの資料の出し入れを行い、③追加情報がある場合は、登録内容修正画面から追加情報

を入力した。この流れをもって資料を分析し、考察をおこなった。

2-1 卒業生へのヒアリング調査

本学の卒業生で昭和38（1963）年より本学で教員を務められていた名誉教授畠山絹江先生⁴⁾に、資料を見ていただきながらヒアリングをおこなった。データベースを利用して、畠山先生の記憶にある資料や書籍、資料判別作業の際に使用方法が不明だった資料などをピックアップし、保管場所から取り出して、その資料にまつわる「当該時期の授業の様子」、「資料の使われ方」、「書籍の使われ方」などについてお話しいただき、多くの情報を得ることができた。

一例をあげると、おでんち（図13）にまつわる話としては、「授業で制作したもので、本学でおこなわれていたバザーで販売していた」、「売上金は校舎増築の費用として寄付されていた」、「一つの身の浴衣、フランス刺繍入り枕カバー、抱き人形、動物の編みぐるみ等も制作した」、「売れ残ったものは、制作した学生本人に返却された」など、学生時代、教員時代の記憶を語っていただいた。また見本着物（図14）に関しては、「（畠山先生が）助手時代に授業の見本用として作成したもの」、「教材として使用するので綺麗に縫わなければならなかった」、「ウールの着物は、背縫い、脇縫い、衿付けなど直線の長い箇所は手縫いではなくミシンで縫った」とのことであった。資料を実際に見ていただきながらお話いただいたこのような甦る記憶を、追加情報として入力することができた。



図13 資料 No.4-001「抹茶色綸子軍記物語子ども綿入れ袖なし上着」



図14 資料 No.1-013「紅緋紬地縞模様単衣長着」

2-2 裁縫雛形

東京裁縫女学校生徒作品を含む、1/3、1/2サイズの雛形の長着、袴、装束等、計23点が確認できた。これら資料は、印章や銘記の有無やその種類、畠山先生へのヒアリングにより、3つに分類することができ、①東京裁縫女学校（東京家政大学）で製作されたとみられる資料が11点、②本学で製作されたとみられる資料が5点、③どちらとも断定できない資料が7点であった。

この裁縫雛形資料については、本研究に先立ち、令和3（2021）年に京都工芸繊維大学美術工芸資料館で開催された展覧会「美術の教育／教育の美術」（2021年9月27日～11月6日）に本学の和裁教育資料を出品した。その際、この裁縫雛形資料について調査をおこなっていたことから、すでにある程度の資料情報を入手していたため⁵⁾、この度の研究では、その情報に追加の新情報を加えつつ情報を整理し、考察をおこなった。以下、東京裁縫女学校（東京家政大学）製の資料と、本学園製資料について、一部の資料を取り上げ考察する。

2-2-1 東京裁縫女学校で製作されたとみられる資料について

この東京裁縫女学校製の資料については、4点に「神林ヒサノ」（図15）、5点に「平瀬シマ」（図16）、製作者とおぼしきこの二人の女性の名前が見える。ちなみに「平瀬シマ」の墨書のある長着の衿付けは意図的に解いた形跡が見られることから、この資料が縫い方の指導に使用されたことが推測できる。また「平瀬シマ」の名前が記された資料には肩書として「高師一年」、「高等師範科二年」、「本科四年い組」の墨書あるいは朱書がある。この二人の名前について各方面から調査したが、本学園との関係が分かる情報がなく、そもそも、本学には「高等師範科」は無い。そこで重要な手がかりとなったのが、同じ場所で見つかった女房装束類の4点に「渡邊辰五郎之見之印」の朱印が見つかったことである（図17）。この朱印は、明治25（1892）年に東京家政大学の前身「東京裁縫女学校」を創設した渡邊辰五郎の検印である。渡邊辰五郎は、1/3サイズの雛形での裁縫教育を確立した人物で、東京家政大学博物館では、東京裁

縫女学校および大正11（1922）年改称後の東京女子専門学校において、明治30年頃から昭和18（1943）年にかけて製作された裁縫雛形を約4500点所蔵しており、そのうち2290点が、教科書や道具類等の附61点とともに重要有形民俗文化財に指定されている⁶⁾。そこで、この二人が東京裁縫女学校の関係者ではないかとの仮説をもって、同館学芸員でこの裁縫雛形に詳しい三友晶子氏に「神林ヒサノ」と「平瀬シマ」と記されている資料についてお尋ねしたところ、多くの情報をいただくことができた。以下、三友氏からいただいた情報とそこから判明した内容である。



図15 資料 No.4-143
「生成り色地裳装束雛形」墨書「神林ヒサノ」



図16 資料 No.4-139
「鳩羽色地単衣比翼仕立て長着雛形」墨書「本裁単衣重／高師一年／平瀬シマ」



図17 資料 No.4-146「卵色地
袷表衣装束雛形」部分 朱印
「渡邊辰五郎之見之印」

（1）「神林ヒサノ」について

神林ヒサノ氏は、卒業生名簿によれば、明治36（1903）年東京裁縫女学校本科卒であるが、東京家政大学博物館資料の「参考品目録」に名前があり⁷⁾、これらの雛形は「高等科」の生徒が製作したもの内、できの良い作品が「参考品」と称する教育用標本として東京裁縫女学校図書館に収蔵されていたことか

ら、神林氏は進学した可能性が高い。京都女子大学にある雛形資料は、神林氏が、東京裁縫女学校高等科在学中に製作した作品であろうと思われる。

(2) 「平瀬シマ」について

卒業生名簿に平瀬シマ氏の名前は無いが、平瀬氏の作品には、東京裁縫女学校高等師範科の検印「高師」の押印があり、同校の高等師範科は明治41（1908）年から大正10（1921）年まで存在したことから、東京裁縫女学校の卒業生であることが判明した。

ところで、渡邊辰五郎が考案し確立した1/3サイズの雛形での裁縫教育の流れを汲むであろう雛形を使った裁縫教育は、全国的に多くの女子大学や女子高等学校でおこなわれたことが確認されている。ちなみに、畠山先生も、学生時代に袴を、サイズは1/2であるが雛形で製作したとのことであった。こうした教育方法の伝播を証明するには、女子教育機関でおこなわれていた裁縫教育の歴史の全国的調査が必要であり、加えて各教育機関の卒業生が手元に残している課題作品等の収集も実態解明には有効な手段であろうと思われる。

2-2-2 本学で製作されたとみられる資料について

ここでは、資料に名札が付いているもの、あるいは押印などから本学関係者と思われる資料を取りあげ考察する。資料は、京都女子大学またはその前身の京都高等女学校（高女）、京都裁縫女学校（裁女）、京都女子専門学校（女専）で製作されたものである。

雛形の手甲、脚絆類の資料とともに保存されていた実物大資料に「甲手／技三ノ二 福田綾子」と書かれた紙箋が縫い付けられた手甲がある。この手甲(図18)は実物大ではあるが、本学の同窓会名簿及び専任教員一覧より、本学の卒業生福田綾子氏の作品であることが分かった。福田氏は、昭和15（1940）年3月に女専技芸科を卒業し、その後、昭和15、16年と裁女・女専の助手を務めた人物である⁸⁾。また、判読はできないものの、氏名が記された紙箋が縫い付け

られた雛形の手甲・脚絆一式もある。こうしたことから、福田氏の学生時代には実物大で製作した手甲は、他の時期には雛形での製作が課題であったことが推測でき、さらには、福田氏は、学生時代に製作した作品を教師時代に、見本、あるいは参考資料として使用していたのではないかと推測できよう。

図19は裾模様が描かれている比翼仕立ての単衣長着雛形である。左身頃裏に朱印で「戸澤」とある。『京都女子学園八十年史』記載の情報より、この雛形資料は、戸澤イマ女専教授（昭和11年4月～昭和17年10月在籍）が製作した見本ではないかと思われる⁹⁾。

印章や銘記のない資料においても本学の卒業生であり教鞭をとられていた畠山先生へのヒアリングにより本学の資料であることが判明したものもある。畠山先生が学生時代にご自身が製作したものと類似したもの（図20）や、授業で学生に製作させたものと類似したもの（図21）があることが分かった。



図18 資料 No.4
-150「左手甲」



図19 資料 No.4
-147「黒地比
翼仕立て単衣
長着雛形」



図20 資料 No.4-162「朱
色地敷布団・掛布団雛
形」



図21 資料 No.4-
134「桃色地 裕
長襦袢雛形」

2-3 部分縫いおよび工程見本

ここでは、部分縫いおよび工程見本について考察する。

データベースから、衿の部分縫い24点、袖の部分縫い12点、揚げの部分縫い4点、その他13点、計53点の部分縫いが確認された。部分縫いとは、実物全体

ではなく複雑な部分のみを製作したものである。着物や羽織など実物全体を何種類も仕立てるには、材料費、製作時間が多くかかる。構造上複雑な個所である衿や袖等の部分縫いをおこなうことで、それらを削減し、効率よくさまざまな形を製作することが可能となる。生徒達は、この部分縫いを課題として学習したり、あるいは部分縫いを見本として実物製作の参考にしたりしたと思われる。

また、工程見本および裁断途中の布が14点確認された。工程見本とは、特定の箇所についての製作過程をあらわした見本のことである。履修者が多い授業で、効率的に学習をおこなうために使用されていたと考えられる。部分縫い同様、複雑な個所をあらわしたものが多くある。

なお、畠山先生の証言から、これらの部分縫い資料・工程見本資料が製作された時期には、教科書として『裁縫精義』¹⁰⁾が使用されていたことが分かったことから、これらの資料と『裁縫精義』の内容との関係を確認したところ、『裁縫精義』に記載の図や各部位の寸法から、資料が『裁縫精義』の縫い方に即して製作されていることが分かった。なお、畠山先生の証言によれば、本学では昭和44（1969）年に、本学の教授であった土井幸代氏が『和裁』¹¹⁾を上梓したため、それ以降は、『裁縫精義』に代わってこの『和裁』が和裁教育の教科書として使用されるようになったとのことである。

2-4 花結び

標本4点、書籍5点が確認できた。

花結びとは、「結び」の種類のひとつである。花結び研究家矢島由佳氏は、「花結び」を定義するなかで伊勢貞丈（1718-1784）が著した有職故実『貞丈雜記四巻東洋文庫』（天明4;1784頃成立、天保14;1843刊行）¹²⁾を取り上げ「『花むすびとは、物の緒をあげまき、あわび結び、その他いろいろ種々、花やかなる結び方を習い覚えたるを云うなり。これも一つの芸なり』とある。」としている。また、矢島氏によれば、花結びは「明治時代に学校教育を通して知識が伝えら

れるようになり、花結びの伝承も学校教育を通じてなされた」¹³⁾。

以下、花結びに関する資料から見てきた気づきと考察である。

2-4-1 花結び標本について

資料 No.4-159の花結び標本（図22）の裏には右から「山川」と墨書で記載がある。これは大正15（1926）年から昭和11（1936）年に女専および裁女で教鞭をとっていた「山川壽」と同一人物ではないかと推測される¹⁴⁾。



図22 資料 No.4-159「花結び標本」

2-4-2 書籍の花結びに関する記載について

花結びに関する情報が載っている書籍は以下の5点ある。

『最新裁縫全書』¹⁵⁾（資料5-001）

『和服裁縫系統的精説 下巻』¹⁶⁾（資料5-028）

『青年学校用 家事及裁縫 衣服篇 下巻』¹⁷⁾（資料5-031）

『裁縫の栞』¹⁸⁾（資料5-038）

『新編裁縫之秘書』¹⁹⁾（資料5-041）

書籍に記載のある花結びの結び方を参考に、実際に当時おこなわれていた花結びを再現することを試みたものの、標本と教科書の結び図だけでは解読が難しく再現することができなかったが、縁あって「日本結び文化学会」²⁰⁾の副会長であった田中年子先生に、当時の教科書をお見せして解読していただく機会を得ることができた。田中先生によると、これらの教科書は、工程図が省略されているためとても分かりにくく、図が間違っているものもあるため、これらの図だけを頼りに製作するのは難しいだろうとのことであった。ちなみに、花結び以外に布小物の作り方が記載されており、それらも同様に製作しようと試みた。しかし、型紙に誤りがある、作り方の説明が大幅に省略されているなどの問題から、教科書に示される完成図を再現することは大変困難であった。

以上のことより、当該時期、教科書は精密さに欠け、覚書程度のもので、教師の指導と見本がある事を前提に作られたものであることが察せられ、教科書の位置づけが現在と異なっていたであろうことが分かった。

2-5 たとう紙

資料製作当時のものと思われる37点のたとう紙から資料情報が得られた。通気性の高いたとう紙は、着物から湿気を取り除きカビの発生を防ぐ効果、一枚ずつたとう紙につつま筆筥に収納するとしわがつきにくく出し入れもしやすいといった効果など、着物を美しく保管するための機能をもつ包み紙である。そのため、本来は経年劣化したものは新しいものと交換するべきものではあるが、呉服店で誂えた着物は、店の情報が記載されたたとう紙に包まれて納品されるため、このようなたとう紙からは、着物が作られた地域や時期の推定に有効な情報を得ることができる。本学の着物資料には卒業生からの寄贈も含まれていることから、呉服店の情報が記されているたとう紙は、たとう紙そのものを薄様紙でくみ着物資料とともに保管することとした。

一例をあげると、資料 No.1-027 「黒地に臙脂源氏車模様袷長着」が包まれていたたとう紙には「お誂え 京都四条 大丸 東京店 東京駅八重洲口 大阪店 大阪心斎橋 神戸店 戸元町」と記載されており、この情報を、備考欄に追記した。

2-6 印章・銘記について

ここでは、名前が書かれている資料と、京都女子大学に関する押印がされている資料について、報告する。名前が書かれている資料は21点、押印がされている資料は29点あった。これら資料について、藤陵会に卒業生名簿・教職員名簿からの情報の提供を依頼するとともに、畠山先生からも情

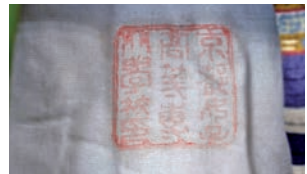


図23 資料 No.4-001 抹茶色 綸子軍記物語子ども綿入れ 袖なし上着にある朱印「京都女子高等専門学校之印」

報をいただいた。加えて、『京都女子学園八十年史』専任教員一覧²¹⁾からも情報収集をおこなった。

また資料にある校印の印影については、「京都高等女学校」、「京都女子高等専門学校之印」（図23）、「京都女子大学被服教室」の押印が確認できた。教科書の印影については「京都女子高等専門学校蔵書」、「KGC」、「被服」、「京都女子大学図書館蔵書」、「教育研究」の押印が確認できた。また、卒業生の氏名が記載された課題提出物や教科書も確認できた。

第3章 資料活用2 資料展示とワークショップ

アーカイブ化した資料の活用事例として、本学の和裁教育資料の存在やその価値を広く伝えることを目的とし展覧会とワークショップ（体験会）を企画・実施した。以下、その詳細と効果の検証である。

3-1 展覧会：京都女子大学和裁教育資料展

期 間：2023年10月30日～11月16日

会 場：京都女子大学図書館交流の床（図24）

資 料 数：29点

見学者数：交流の床通路に沿ったギャラリーであるため見学者の総数は分からないが、オープンキャンパス期間も展示をおこなっていたこともあり、多くの方に見学いただけたように思う。

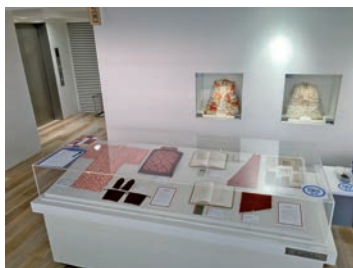


図24 京都女子大学和裁教育資料展 展示の様子

3-2 ワークショップ：京女の今と昔を結ぶ《花結び》

期 間：2023年11月8日、9日の2日間にわたって4回開催

会 場：京都女子大学図書館交流の床

内 容：和裁教育資料「花結び標本」を足掛かりとして「花結び」について学び、実際に「花結びブローチ」を手作りする体験教室。（図25、26）

参加者：在学生19名、卒業生13名、計32名



図25 花結びワークショップの様子



図26 花結びワークショップで製作したブローチ2種

3-3 効果の検証

回答数：展示 58名／ワークショップ 32名

《展覧会アンケート結果》

展覧会は、計58人にアンケートを回答していただいた。内訳としては、最も多かったのが本学在学生で27人、次いで本学卒業生が13人、本学教職員が4人、オープンキャンパス参加者が1人、その他が13人であった。

アンケート結果の詳細は割愛するが、ほとんどの方が、本学の裁縫教育資料の存在をご存知なかったこと、この度の展示を見て「京都女子学園に残るこれらの裁縫教育関連資料は重要」と感じていただいたことが分かった。

また、いただいた意見（自由記述）に、「資料をこれからも残していくべきだと思った」、「自分が学んでいる大学の歴史を知ることができて良かった」、「知

らないと『ない』ことになってしまうと思うので、貴重な資料を後世に残すためにも知る機会が必要だと思った」など展覧会開催の意図が伝わっていたことが確認できる記述があり、意義のある展覧会であったと確信できた。

《ワークショップアンケート結果》

ワークショップは参加者全員にご回答をいただいた。この結果も詳細は割愛するが、内容、時間等、ほぼ全員が満足と回答。製作の難易度は「やや難しい」が約半数を占める一方で、頂いた意見のなかには、「もっと他の花結びを知りたい」、「色々な結びをやってみたい」といった意見もあり、花結びに対して多くの方に興味を示していただくことができた。

おわりに

総括として以下、本研究の目指すところにあった二つの目標に対する研究の成果と今後の課題についてまとめる。

資料整理とアーカイブ化については、学内に散在していた裁縫教育資料を整理し、小規模プロジェクトではあるがデータベース化することができた。このアーカイブ化によって本学園の和裁教育資料の全容を把握することすることができ、これを本学の歴史を語るビジュアル資料群として位置付ければ、一定の成果をあげることができたと言えよう。

このアーカイブ化に関する今後の課題としては、属性判別・計測項目については、検討の余地がある。他大学でも今後おこなわれるであろう裁縫資料のアーカイブ化において、この点を情報共有し、いずれは、全国的に共通の項目が設定されることが望まれる。またデータベース検索方法については、まだまだ未熟で、高度な検索方法を模索する必要がある。加えて、この研究で収集した資料情報で作成したデータベースは、将来的には、展示公開の効率化やデジタルアーカイブとしての Web 公開など、さまざまに活用できると考える。今後は、学外への発信について検討したい。

アーカイブ資料の事例的活用については、「資料活用 1」において、データベー

スを利用し、アーカイブ資料を研究資料として活用事例を示した。この事例活用で、大正・昭和期の和裁教育の実態を示すことができたことは、今後の和裁教育研究活動に資する可能を持つという点において、その価値を示したことに他ならない。また、「資料活用2」では、展示とワークショップに活用し、在学生、卒業生に資料の存在とその価値を伝えることができた。

この資料活用に関する今後の課題としては、この資料の保存場所、管理者をどうすべきか検討し、恒久的な保存と活用を模索する必要がある。また、学内に留まらない有効な資料活用方法の検討も必要であると考えます。

最後に、本学園と同様に長きにわたり女子教育に携わってきた女子教育機関が、残存する教育資料の整理・保存に力を入れ、それを、「伝統」の表象として、ブランド力向上に活用するという動きもみられはじめたなかで、本学でもこうした研究活動の必要性を強く感じる場所であることを申し添えたい。

付記

本学和裁資料の多くを、学生の立場で手に取り参考にし、あるいは教員の立場から教材として使用された（なかにはご本人が製作されたものもあった）名誉教授畠山絹江先生にお話を伺うことができたことは大変ありがたいことでした。畠山先生に心より感謝申し上げます、ありがとうございました。

また、本研究を進めるにあたっては、令和5年度卒業生の石田妃奈子さんと大平詞美さんに卒業研究として全面的に協力していただきました。この協力に対しこの場を借りて感謝の意を表します。

本研究は、令和5年度京都女子大学宗教・文化研究所研究助成を受けたものです。

主な参考文献

- 京都女子学園編『京都女子学園創立50周年記念誌』京都女子学園（1960）
- 京都女子学園 学園史編纂委員会編『京都女子学園八十年史』京都女子学園（1994）
- 京都女子学園編『京都女子学園百年史 心の学園——一年のあゆみ』京都女子学園（2010）

- 『京都女子学園要覧 2016年度版』京都女子学園（2016）
- 『らしさを つよさに 未来をひらく 京都女子大学 100年の歩み』京都女子学園（2021）
- 青木美保子「京都女子大学の裁縫教育」『美術の教育／教育の美術』京都工芸繊維大学美術工芸資料館（2021）pp.29-36
- 長弘真弓・森理恵「京都府立専門学校における裁縫教育の意義」『京都府立大学学術報告. 人間環境学・農学』京都府立大学（2003）
- 土井幸代『和裁』同文書院（1969）
- 大塚末子『新しい和裁』東京同文書院（1969）
- 石田はる『和服裁縫系統的精説 下巻』中文館書店（1941）
- 柴田志げゑ 池部芳子 永井房子 佐野恂子『新和服裁縫（全）』建帛社（1967）
- 横山千年枝『和服寸法百科』ふたば書房（1994）
- 水嶋英治、谷口知司、逸村裕『デジタルアーカイブの資料基盤と開発技法—記録遺産学への視点—』晃洋書房（2016）
- NPO 知的資源イニシアティブ『アーカイブズの作り方—構築と活用入門』勉誠出版（2012）
- 東京国立博物館 博物館情報処理に関する調査研究プロジェクトチーム『ミュージアム資料情報構造化モデル』（2005）

註

- 1) かつて和裁教育をおこなっていた教育機関は和裁教育資料を保管しているが未整理の状態であること、あるいは、そのような機関が改組に伴い保管していた和裁教育資料の多くを廃棄したという話は、ここ数年、家政系の学会に所属する教員達が共有する情報であり、この状況に關しての問題意識も共有するところである。
- 2) 武庫川女子大学付属総合ミュージアム、東京家政大学博物館、椋山女学園歴史文化館、文化学園服飾博物館、共立女子大学博物館、以上5つの機関の資料情報を参考にした。
- 3) 本資料には「さるべ（さるこ袴トモ云フ）農家ノ女子たちガ野良ニ出テ働ク時ニ着用スル。生地ハ紺無地ノ木綿又ハ麻ヲ用フ。上衣ニハごぼ衣裳ヲ着用スル。」と記したメモ書きのある紙が添付されていた。
- 4) 名誉教授 畠山絹江先生の生年月日および略歴は以下の通りである。1937年12月12日生／1956年 京都女子大学被服学科入学。／1960年 京都女子大学被服学科卒業。卒業後、兵庫県の女子高で高等学校の教諭を務める。／1963年 京都女子大学被服学科副手となる。その後、助手、助教授、教授。／2003年 定

- 年退職、名誉教授となる。
- 5) 同展覧会にともないおこなった本学資料の調査に関しては、青木美保子「京都女子大学の裁縫教育」『美術の教育／教育の美術』京都工芸繊維大学美術工芸資料館（2021）pp.29－36を参照されたい。
 - 6) 三友晶子「歴史服の裁縫雛形に関する一考察」『東京家政大学博物館紀要』Vol.22, 東京家政大学博物館（2017）pp.165－177
 - 7) 三友晶子「標本としての裁縫雛形」『東京家政大学博物館紀要』Vol.19, 東京家政大学博物館（2014）pp.137－149
 - 8) 京都女子学園 学園史編纂委員会『京都女子学園八十年史』京都女子学園（1994）p. 658
 - 9) 京都女子学園 学園史編纂委員会『京都女子学園八十年史』京都女子学園（1994）p.656
 - 10) 奈良女子高等師範学校裁縫研究会編『裁縫精義』東洋図書（初版1927）。全7冊〈1. 基礎及単衣篇・2. 袷及綿入篇・3. 羽織篇・4. コート及作業服・5. 帯及袴篇・6. 襦袢及寝具篇・7. 特種物篇〉からなる同書は、奈良女子高等師範学校（現：奈良女子大学）が発行した和裁の教科書である。本学卒業生畠山先生の証言から、当該時期には、本学の和裁を教授する教員のなかに奈良女子高等師範学校出身の方がいらっしゃったことから同書が教科書として使用されていたのであろうということが分かった。また、畠山先生が元同僚の先生にお尋ねくださり、その証言から、本書は女専時代から教科書として使用されていたことも分かった。
 - 11) 土井幸代『和裁』同文書院（1969）。同書は本学名誉教授土井幸代先生が在職中に、大学での和裁教育に対応し、多くの図とともに詳細な解説を加えた、当時としてはそれまでにない「わかりやすく新しい」和裁の教科書として出版したものであった。昭和44（1969）年から平成15（2003）年まで和裁の授業を担当する教員は同書を教科書として使用していた。このような同書にまつわる話を、その編集にも携わっておられた畠山先生が当時は振り返りながら語ってくださった。
 - 12) 『貞丈雑記 四巻 東洋文庫453』平凡社（1986）p.223
 - 13) 矢島由佳「江戸時代にみる花結びの伝承 ジェンダーの視点から」『デザイン理論』No.83（2023）p.50
 - 14) 京都女子学園 学園史編纂委員会『京都女子学園八十年史』京都女子学園（1990）p.652
 - 15) 佐川貞子『最新裁縫全書』国民文化書院（1948）
 - 16) 石田はる（東京女子高等師範学校助教授）『和服裁縫系統的精説 下巻』中文

館書店（1941 初版1933）

- 17) 牛込ちゑ、山下榮三『青年学校用 家事及裁縫 衣服篇 下巻』東京開成館（1938）
- 18) 誠修學院編纂『裁縫の栞』郡是製絲株式會社（1928 初版1925）
- 19) 高橋貴四郎（福岡県若松高等裁縫女学校長兼直方女子工芸学校長）『新編裁縫之秘書』福岡女子技芸教育会（1917）
- 20) 「日本結び文化学会」とは、結び文化を広めることを目的として開かれた会である。平成4（1992）年に「日本結び文化の会」として発足し、平成13（2001）年に「日本結び文化学会」と改称した。平成4（1992）年、京都府立文化博物館にて開催された「第1回日本結び文化展」をはじめとし、国内で16回の日本結び文化展が開催された。また、「東亜三国結び展」や「日韓結び文化展」に参加するなど、台湾や韓国の研究者の方々とも国際的な交流をおこなっていた。令和4（2022）年に閉会した。
- 21) 京都女子学園 学園史編纂委員会『京都女子学園八十年史』京都女子学園（1994）pp.647－701

受付日 令和6（2024）年9月11日 採用日 令和6（2024）年12月2日

<キーワード>

和裁教育資料 裁縫教育資料 アーカイブ化